Osaka University Knowledge Archive

Title	序論 ： 日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！
Author(s)	林田, 雅至
Citation	Communication-Design. 2011, 5, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4701
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

序論：日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！

林田雅至（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）

Introduction：A major step towards reaching our goal of being a Language and Cultural Barrier Free Japanese Society.

Masashi Hayashida (Center for the Study of Communication-Design, Osaka University)

一般的に日本社会のことを批判的に表現する「異質な他者を排除する和の論理」について、様々な事例によって、これが真に日本的なものかどうかを見極めようとした。直面する問題を解決する際に、複眼的な視点を有することなく臨むことによって問題の解決を難しくする局面が多々見られることが改めて認識された。

Generally speaking, Japanese Society is critically defined as that based upon a logic of harmony to eliminate heterogeneous others from the Society, and observing various cases, we attempted to prove if this is really true. In many cases, it is often seen that to face the problem without having multifaceted perspective makes it difficult to resolve it.

キーワード
言語・文化的バリアフリー、複眼的視点、多言語情報システム
language and cultural barrier free, multifaceted perspective, multi-language information system

1. はじめに

2009 年度 CSCD で実施した「外国籍住民の日本語・日本文化学習支援プログラム」において、グローバルな多言語・多文化状況下「相互理解のための日本語」という考えに基づき、「言語のためのヨーロッパ共通基準枠（Common European Framework of Reference for Languages）」通称 CEFR に設定された評価基準を参考にした、生活者としての外国籍住民（外国人）を対象とした学習プログラムの見直しが行われようとしている現状を踏まえたものの、デフレ苦境の状況は極めて厳しく、雇用創出の政策提言が最優先課題として位置付けされた。一方、「観光産業」による雇用創出プログラムとのタイアップの必要性が認識された。こうした内容を報告書（2009 年度 CSCD 社学連携事業，大阪市・大阪大学包括協定実績）としてまとめた。そして継続して、2010 年度、より幅広い視野でプロジェクト「日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！」を展開した。

常に頭を擡げたのは、一般的に日本社会のことを批判的に表現する「異質な他者を排除す

る和の論理」で、これが真に日本的なものかどうかを見極めようとした。実際にはミクロノリティに対して母社会はあらゆる意味で冷たく、同化を促すことが生物的な論理で普遍的に求められる。何も日本社会に限ったことではない。ただ、日本社会では対外的にせよ、内的にミクロノリティあるいはマイノリティにせよ、一義的な選択肢しか用意することなく、所謂「共生」を促す傾向にあり、一部からは歴史性を無視した強制同化が未だに生きていると批判を浴びるのである。以下は実践報告の一部であり、中で参与観察を具体的に紹介している。

2. 時代に翻弄されるテキスト

第二次世界大戦前及び戦争中における一義的な価値観の支配的席捲は周知の如く、2011年1月19日に実施した豊中「洪庵塾」（林田研究室にて随時実施）、及び1月24日に実施した「ひとことといちば」（学生中間支援組織「そこまでやって委員会」主催）で取り上げた、夏目漱石が絶讃し、文壇デビューとなった出世作、芥川龍之介作「手巾」は新渡戸稲造を暗示的に酷評したことでも知られ、漱石がこよなく愛した「高等遊民」像を脱却したものとしても高く評価される。ただ、戦前・戦中においては「善き女性像」を作り上げるために女学校の教科書において、芥川が短編末尾において「どんでん返し」を図った結末部分は削除されて、所謂「良妻賢母的」イメージが知識注入されたのである。「洪庵塾に遊ぶ」において、メディア・リテラシーの恰好の教材であった。

3. 戦時に翻弄される多言語話者

また、現在87歳になる日本・ポルトガルと二重国籍を有する数奇な運命を辿った人物の口述筆記を進めている。彼は、元気とは言え、高齢であり、昨年8月26日についで、暫く時間的間隔をおいた9月18日、彼の知り合いで、母方ポルトガル人3世経営になる神戸・三宮にある串カツ屋にて舌鼓みを打って、伊藤博文の隠密留学の金庫番光村弥兵衛の庶子利藻創業「光村印刷所」（実家拙宅現住所）の近隣にあったカトリック教会、外国人御屋敷（一軒は林田母方祖母が世話をしていた）などを「酒の肴」としたのである。

彼は5歳でポルトガル人父親をマカオにて客死により失い、日本人として神戸の公立小学校教育受け、第一使用言語＝母語は日本語（国語）でありながら、中等教育を英国系ミッション・スクール（現聖ミカエル学院）に通ったためか、また後になって明治大正期文学を通じた独学によるせいか、中上級学習日本語（話し言葉）にやや「書き言葉的要素」が優位と

なる傾向が話していて時折散見される。

一方、実用英語力をしっかり身に付けた高度な外国語運用能力は『デイリー毎日』で英語記事を執筆せしめ、記者魂さえ獲得しているほどである。そんな彼も戦争中、小兵の碧眼軍人として鳥取陸軍師団に従軍している。戦前『サンデー毎日』表紙（現在東大の教え子が国会図書館で調査中）を飾ったデザイン技術力は「宝石鑑定士」として、戦後錬磨され、60-70年代大手百貨店で令名を馳せる「ラグジュアリー・デザイナー」として、彼の宝飾作品が陳列ガラス棚を賑わせ、宝塚少女歌劇団の衣裳係から舞台用装身具製作の依頼が舞い込む契機となり、そのことが宝塚女優自身から個別注文までを引き受けることになった。また、興行界の大型注文から、歌手の舞台衣装アクセサリー製作に至るまで、その活躍の幅は一気に広がったのであるが、そうした順風満帆の勢いが、東京銀座・宝飾店による作品販路拡大の「甘い誘惑」に抗し切れぬことになり、結果的には宝飾店の銀行融資焦げ付き、財産持ち逃げという確信犯の犠牲者となったのである。その後裸一貫から本格的に英国宝石鑑定協会の国際認定証を受けることによって、鑑定士養成の教授、技術伝授に献身的に取り組むことになり、新たに人生に活路を開いたのである。

肝心な点は実は、彼が戦中に軍隊内で受けた奇妙な差別であった。青い瞳をした彼の日本人としての献身ぶりがかえって軍隊仲間から疑われ、「弾が前方から飛んでくるとばかり思うな、背後からの射撃にも注意しろ」などと脅迫をされたのである。戦争中「鬼畜米英」を標語として、一億総動員体制で臨む折に敵国の言語は敵対言語として学ばれず、排斥された。彼は英語と日本語のバイリンガルでありながら、有能な人材として扱われず、一歩兵に甘んじたのである。戦後、進駐軍が管理統制を実施した際、戦前神戸の聖ミカエル学院時代の同僚であった、英国人やオーストラリア人が派遣部隊の将校として来日し、彼に会った折に、戦争中の彼の処遇を気の毒に思ったそうである。ミッション・スクールの元同僚たちは帰国後、日本語話者、有能な人材として高く評価されたのである。

4. アンデスメロンの如く甘かった核原発政策

戦後のチューインガムとチョコレートの甘い誘惑に対米従属となった経緯は誰もが知っていることではあるが、こうした無節操な豹変は、特に海外からの批判の的となるのは至極当然のことである。形式的に過ぎなかった名目論「非核三原則」の夢が、事もあろうに未曾有の大地震という自然災害によって決定的に粉砕され、恰も自刃するが如く、自然界への原子力発電所の放射線漏れを招く危機を引き起こすとは誰が予想し得ただろうか。しかし、それは現実に起こった。

何事においても少なくとも二律背反的な二面性、二極性、場合によれば、複数面、複数極

を想定することによって、薄氷を踏む思いにせよ、平衡感覚を身に付けておかなくてはならないだろう。原発事故については、事後処理の経過を静観していて、戦時下有事と大災害有事を区別して、所謂「想定外＝大災害有事」に備えた予防策が想定されていなかったことが判明したのである。

5. はじめに家族内の危機分散ありき

2010年度末イベリア半島での海外研修の中で（2011.3.8-21）、2年ぶりに再会したモンゴル系ロシア人彫刻家は、逞しく人生の活路を開き、モンゴル英雄叙事詩の挿絵展示を成功させ、また元公爵家一族の財政的支援を受けて公爵家専属修道院教会の系譜歴史書の挿絵を任された。そのことは彼にとって大いなる自信となった。彼はまた、今回20世紀最大の欧州の詩人として誉れ高いポルトガル人フェルナンド・ペソーアの作品を題材とした水彩画（大小）を取り交ぜた作品群の準備に心血を注ぐことになった。

サンクトペテルブルグに住む妻は英語教師をしながら、ロシアで経済自立をし、夫が好んだ最果てのリスボンに頻々と出かけ、海外旅行を楽しんでいる。長女はサンクトで経済学部を中退した後、リスボンで観光産業に開眼し、現在ニューヨークのモンゴル人コミュニティに支えられ、働きながら、経営学を学んでいる。長男は首都モスクワに出て経済学部に通っている。本人もこれから先10年のうちにリスボンで詩人の彫像を製作することを夢見ている。やがて、ニューヨークの娘の元へと合流する思いを覗かせてくれた。ポルトガル風の白豆のフェイジョアーダは元祖奴隷料理に端を発するブラジルの黒豆フェイジョアーダとは異なり、特に甘味を感じさせ、とろみ感溢れる煮込み料理であるが、彼はそんな旨煮を堪能し、赤ワインを飲み干してほろ酔い気分で語ってくれたのである。

ここにも、島国根性には及びもつかない家族内の危機分散が実践されている。複数の価値観を共有・共存させながら、人生設計を巧みに図っている。複眼視点のすぐれた鑑を見た思いである。「百聞は一見に如かず」であるものの、「言うは易し、行うは難し」である。

図1　モンゴル系ロシア人彫刻家による「モンゴル英雄叙事詩・挿絵展示会」の招待状（2010）

図2　フェルナンド・ペソーアの講演・展示会のポスターの背景を飾る素描画（2011）

6. 多言語・多文化活動アラカルト

年度当初にはグローバルコラボレーションセンター（通称：グローコル）の授業「グローバル共生論」の一環で「現代日本の多文化・多言語状況」（2010.4.26）「現代日本の外国人労働者問題」（5.31）に触れ、厚生労働省へ社会的統合を図るなら、雇用現場で「やさしい日本語」の学習機会を持つことを現場に義務化しなければ、意味がないと苦言を呈する契機ともなったのである。

大学院授業科目「多文化サポート概論」のゲスト・スピーカーとして、元来日系2世としてすぐれた日本語能力を生かして経済自立を果たしながら、多文化・多言語サポートに資する通訳・翻訳業務に献身的に取り組む野中モニカ氏は、昨年度に続き、寄稿してくれた（林田［2011：13-18］）。年度半ばには創立20周年になる「関西生命線」（代表：伊藤みどり）へ祝辞を述べる機会にも恵まれた（伊藤［2010：23-24］）。そうした内容も踏まえて、大阪府からの要請もあって、在住外国籍住民に資する観光政策を「大阪府観光戦略（素案）への提言」としてまとめることになった（伊藤［2010：7-12］）。

昨今取り沙汰される医療観光についても、言語障壁を取り払う視点から、また社会実験のコーディネートの視点から、相場美紀子氏は「南海電鉄グループ医療検診体験旅行」をまとめている（伊藤［2010：19-29］）。

7. 多言語人材リクルートの達成感

年度末になって、外部から多言語対応の難題が寄せられ、結局短期決戦に挑戦可能であることは旧外大時代から変わらず、現在「洪庵塾」の実施責任を負う者として、対応を余儀なくされた。皮肉で書いているのではなく、それは嫌なのではなく、監修・調整過程・展開の意外性や面白みなど何物にも代え難い達成感が潜んでいる。

報告書『日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！』巻末資料としている大阪市からの依頼で寄稿している連載「Global Public を考える」（p.34-49）調整役の職員に、今回「ポルトガル語スピーチコンテスト」実施にあたってお世話になったが、大学にとっての地域に存立する行政との30年にも及ぶ不変・不易の人間関係は「何物にも代え難い」人的財産であると回答したことがある。当然のことながら、その人的財産、即ち円滑に運用される人間関係に我々が有する知的財産を連結させれば、本来的な「地域連携事業」は完遂されるのである。これまで有名大学の有期限研究調査に行政・地域はどれほど翻弄されてきたかそれに関する

酷評を聴くことしばしばである。予算の切れ目は連携の終焉という調査研究は人的財産を生まず、研究調査報告書だけが積み上がる仕組みである。

閑話休題。年度末の難題はギリシャ語医療通訳者の周旋であった。来年度4月から初等教育現場に口頭英語教育を取り込むことを一義的に外国語運用能力向上の切り札と捉える我が国おいて、またこれまでも外国語＝英語の幻想を植え付けられてきた国家において、現代ギリシャ語の話者、ネイティブ・スピーカーの存在を探すのは至難の業である。本学に3人の存在が確認された。教員のパートナー、文学研究科に学ぶ無類の日本好き天文学者、そして何と特に欧州ポルトガル語に関心を抱く日本国籍を有する2年生であった。いずれも所謂言語ストレスを抱えるミクロノリティであった。

8. 多言語人材の臨機応変的柔軟性

後二者とは具体的に接触でき、最終的に今般の通訳は学部2年生に託すことになった。初等教育をドイツで受け、中等教育をギリシャで、そして日本で5年を過ごす20歳の若者は、自愛心に溢れる精神的にしっかりと自立した――『日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！』報告書、巻末資料「洪庵塾に遊ぶ」（2011.1.24）にある長與専斎の「自愛心」参照――逞しい人物で、言語ストレスを抱えるあまり、つまり「ギリシャ語」を話す機会が皆無であることに起因する言語ストレスであるが故に、無報酬でよいとまで言い始めるので、それは制止した。昨今医療観光の関連でよく話題にされる医療通訳であるが、患者及び家族の抱える言語ストレスを解消するためには、そして日本側医師、看護師、医局などの言語ストレスを緩和するためには、当該言語の日常表現を分かり易い語彙、こなれた文法で通訳（仲介）できる所謂「高度な外国語運用能力」が必要であることが判明した。医療通訳と呼ばれる範疇においてその占める割合は相当に大きいと思われる。今回短期決戦ではあったものの、末期ガンの難病手術、術後回復で深度ある複雑な人間関係を取り持つことに成功した学生は、単に言語ストレス解消に個人的に尽力貢献しただけではなかった。そのこなれたパラフレズ（やさしく言い換える）能力の高さに軍配は上がったのである。

それにしても、病院側と患者側の両者初対面の懇談会に、碧眼で西洋人の顔立ちの2年生の存在は、それまで患者の弟も含めた3人の「ギリシャ人」が病院内において、まるで「よそ者」扱いで孤立していたものの、そんな不安な気持ちを瞬時にして払拭するものであった。母親は懇談の席上に煎れ立てのギリシャ・コーヒーを用意し、クリームを挟んだ手作りカナッペまで拵えて現われたことは、まず病院側のスタッフを驚かせるのに十分であった。そして席上1月半に及ぶ言語ストレスを抱え込んでいた母親の演説はゆうに30分に及んだ。それまでならば、言語障壁に苦しんだ日本側には「怒れる仁王像」にしか映らなかったが、通訳を

介して、理路整然と情熱的に淡々と語る母親像であることが理解されたのである。後日、その2年生通訳者と文学研究科の天文学者を外国語「洪庵塾」(林田研究室)で初顔合わせさせ、35年も前になる黎明期の岩波ホールのヒット作テオ・アンゲロプロス監督『旅芸人の記録』の一部を鑑賞してもらったが、その映画の語り口はやはり古代ギリシャ演劇の女主人公の独白のそれであり、また付添いの母親のギリシャ語のそれであったことを改めて確信する機会となった。娘に献身的に看病する母親の淡々とした崇高ささえ漂う語り口は言語障壁が立ちはだかると、感情を爆発させた怒れる姿にしか映らなかったのである。

ところで「洪庵塾」の二人のギリシャ語話者も1時間ほど立て板に水を流すが如く、淀みなくギリシャ語の発話がなされた。普段話す機会などありませんからと異口同音に同時にコメントしたのが印象的であった。

9. 言語ストレスを解消するカフェ繁盛

因みに、「報告書」巻末資料にもある「外国人とのふれあいカフェ」――箕面の国際交流協会とCSCD同僚の哲学者本間直樹による「哲学カフェ」を基軸に展開したオレンジ・カフェ(4回シリーズ)は各回40名を超える参集となり、今年度「オレンジショップ」事業の最大の成功例となった――にせよ、ブラジル人留学生及びポルトガル語圏留学経験日本人による言語スレス解消のためにスタートした「ブラジル・カフェ」にせよ、ミクロノリティの抱える共通の悩みを解消するには打ってつけの手段であることが今更ながら再確認されたのである。

病院の医療通訳の話に戻ると、そうした日常会話が通訳を介するにせよ、為されて初めて人間関係は構築され、そして初めて肝心の医療行為の実現が可能となる塩梅である。

そうした種蒔きは不可欠と思われる。

10. 多言語バリアー・フリーの取り組み

今年度も通年参加した「よみかき茶屋」において、年度末就職活動のサポートの一環でセミナー「共生ひろば・タウンミーティング2011 識字・日本語を学ぶ人たちと生活・就職・職場の問題で、しっかりネットワークをつなごう!」が3月6日に開催され、40名ほどの参加者があった。そこで、労働契約を結ぶ前に、あるいは労働関係の確立の前に、人間関係が確立されて、相互に信頼関係が醸成されない限り、雇用主と従業員という関係の設定は不可能であると指摘したが、それは上記医療通訳の経験も踏まえてのことであった。

こうした状況に対して、「失業者が増え続けている日本で生活している在日外国人がホンネで話し合う。情報交換し連帯感を高める」をテーマとした行政イベントの広報サイト（http://www.osakademanabu.com/umeda/news/post_96.html）も公開されている。

田中規久雄氏（法学研究科、兼任教員）は、「高度法情報発信のための多言語情報の最適組み合わせに関する研究」（科研，2010-13）共同メンバーであり、今回大学院授業担当のロシア語司法通訳者松本正氏の積年の経験を踏まえた成果の一端をここに巻末資料としてまとめることにした。（林田［2011：55-91］）。

保健センター所長、守山敏樹医師は、「洪庵塾カフェマスター」として豊中キャンパスにおける「洪庵塾」の定着化の先駆けとして 2010 年 10 月 25 日「洪庵塾に遊ぶ」を主催し、民業で展開したユネスコ主催事業「若年層国際理解教育海外研修」（2 コース）の同行学生による帰国報告会を監修された。同行学生選抜は 10 倍を超す難関となり、今後も同種事業を継続する予定であり、年度末 3 月にも 3 コースについて同行実施され、同様に 10 倍近い選抜倍率であった。

また、守山医師には多言語版『医療現場における外国語指さし会話ブック』（仮）上梓の総監修をしていただいており、その趣旨は「近年，国際化に伴い世界各国から多くの人が日本を訪れるようになった。しかし、医療機関でのコミュニケーション能力は命にかかわる問題であるにもかかわらず、言葉の問題により十分な医療サービスを提供出来ていない実態がある。外国人の多くもまた言葉の課題を原因として、医療機関にかかることに不安や不満を感じている。意思疎通が不十分なままだと適切な診断・治療に支障がでるばかりか、誤解によって患者が望まない治療を行ってしまうケースもある。彼らが安心して医療機関を受診するためには、医療機関側の知識や対応も重要となる。そこで、本書は、問診～診断～治療を行う上で、口頭での意思疎通が困難な場合にその場で本書を指さしながらコミュニケーションをとることで、意思疎通を容易にするツールを目指す」というものである。

11. Information Architecture のゆくえ

年間を通じて様々な試行錯誤を繰り返しながら、排他的意識の排斥を目指したつもりである。偏見の除去には年数を要するものである。また、ミクロノリティ及びマイノリティへの多言語情報提供をシステム化することは実は焦眉の問題でありながら、Information Architecture を構築することは容易くないのが現実である。

本実践報告書は、林田雅至（2011）「はじめに豊中キャンパスにおける「洪庵塾」構想ありき」（『日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！』報告書、2011.3.31、p.2-6）に若干加筆・修

正を加えたものである。

引用・参考文献：

芥川龍之介作「手巾」（電子データ）
http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/43_15268.html

林田雅至（2010-2011）「Global Public を考える」『大阪・サンパウロ姉妹都市協会ニュースレター』2-9.

林田雅至（編）（2011）『日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！』報告書［2010 年度 CSCD 社学連携事業、大阪市・大阪大学包括協定実績］、CSCD「コミュニティ」部門：多文化コミュニケーション・デザイン叢書Ⅲ.

伊藤みどり（編）（2010）『関西生命線ニュース』40.

大阪府府民文化部都市魅力創造局国際交流・観光課（2011）「平成 22 年度緊急雇用創出基金事業・外国人府民への情報流通促進調査事業報告書～行政情報の流れについて～」http://search.pref.osaka.jp/kanko/jyouhouryutsu/index.html